

1/30(土) まいど! 倫理部では、1月のテーマ「心即太陽」初代丸山敏雄へ二代目竹秋理事長へ  
三代目理事長 敏雄と繋がる倫理研究所です

今後、いかなる歴史の、日本の名流をつないでいくのでしょうか。

孝七郎 平島

2021. 1. 30~2. 5

# 今週の 倫理

1月のテーマ | 心即太陽

# 1214号

倫理運動は昭和二十年九月三日にスタートしました。創始者であり、理事長として先頭に立つ丸山敏雄の働きぶりは超人的で、多岐に亘っていたといえます。一方で、人の苦悩を一身に引き受ける「身代わり」の祈誓と実践により、その肉体は急速に消耗し、還暦を待たずに逝去したのです。亡くなったのは、昭和二十六年十二月十四日、創始からわずか六年余りのことでした。

葬式直後の同月二十三日に臨時総会が開かれ、推されて後任に就いたのは丸山竹秋でした。創始者の長男で当時三十歳、戦後復員してから、父の仕事を支えていました。その年度の事業報告には、「悲しみの中に新しい希望が見出された」と記されています。

開店や就任に際して、祝福を贈る、贈られるということがあります。難い状況下で、光明を見出し一歩が始まるということもあるでしょう。では、丸山竹秋は、どのようなその第一歩を踏み出したのでしょうか。

敬愛する父であり、師と仰いでつき従う相手を失う喪失感のなか、火葬場では焼かれていくその姿を静かに凝視しました。心中深く期するところがあつた竹秋は後年、当時の想いを次のように述べています。

至らざることは、百も承知である。しかし寸刻も躊躇すべきときではない。ここに至つた以上は、生命をはめて、亡父の遺志を発揚させることだ――。

そうして断固たる第一歩をふみだしたのであります。こうして私の第二の人生ははじまりました。〔岐路に立つ〕九五頁



## 境遇の順逆を問わず 希望の焰を燃やす

丸山竹秋が、第二代理事長として四十五年つとめ上げ、倫理運動の礎が築かれて現在に至ります。そのなかで重要な功績の一つに『丸山敏雄全集』の刊行があります。同全集は昭和四十七年に第一回配本、同五十六年に完結しました。純粋倫理を発見・唱導した人物の事績と思想を漏らさず取り纏め、後世に遺す基盤が完成したのです。

完結後に「もういつ死んでもよい、という心境だよ」と周囲に漏らした竹秋が『全集』刊行を決意したのは、敏雄の葬儀が執り行なわれた昭和二十六年十二月十八日でした。以来、組織の長として全体の舵を取りつつ、機が熟す時をひたすら待ちました。

口で説くだけでは消え去ってしまうけれども、文字に記せば永遠に残る。それは人類の幸福を建設する上の、大きな基盤となるに違いない――衰えていく身体を奮い立たせて筆をとり続けた創始者の念願を受け継いだ丸山竹秋は、それを自身の使命と心得て、希望の焰を静かに燃やし続けました。そして、時機到来と見るや、果敢に踏み出して『全集』刊行を成し遂げ、長い間、心深くに思い続けた悲願を果たしたのでした。何とかかなりそうだから、順調だから希望を抱くのではなく、境遇の順逆を問わず、自から燃やすところに〈希望の真の意義〉があるのです。いかなる状況にあつても、不断(きえず)の希望の燈火を燃え立たせる自分でありたいものです。

本文参考文献『丸山敏雄全集』刊行通信1(第四巻・付録)『竹の心』『竹のごとく』